

## 日本におけるピカソの受容と歴史的回顧—影響、批評、収集の軌跡

塚田美香子

### 日本におけるピカソの第二次受容(序文)

日本におけるピカソ受容の問題は、これまで当館『館報』(55～56号)に「日本におけるピカソの第一次受容」と題し、戦前の日本にパブロ・ルイス・ピカソ(1881-1973)がいつ頃、どのように紹介されて日本美術界に受け容れられてきたかを論じてきた。

20世紀初頭、ピカソはキュビズムとともに日本へ紹介されたが、その美術様式が難解なこともあって、当初支持したのは一部の前衛的傾向の画家たちだった。しかしその後、キュビズム以外のピカソの様々な芸術スタイルが紹介されるようになると、なかでもピカソの新古典主義時代に多くの美術関係者は魅了され、影響を受ける。第二次世界大戦への突入で、日本の画家たちは軍事統制下で戦争画を強いられてはいたが、ファシズムの漂う最中、《ゲルニカ》(1937年、国立ソフィア王妃芸術センター、Z.IX:65)を描いたピカソは無視できない存在だった。

戦後のヨーロッパ美術界では、マティス、ピカソらモダン・アートの巨匠たちの芸術から抽象絵画へと移行し、ミッシェル・タピエが組織する国際的美術運動のアンフォルメルや、ミッシェル・ラゴンが提唱する新エコール・ド・パリの画家たちにピカソ以後の作家として眼が向けられるようになる。一方、アメリカでは、ピカソの影響を受けたボロックなどの抽象表現主義の新しい世代の

画家が現れて、最新の芸術市場の軸がヨーロッパからアメリカへと移されていく。日本ではアンフォルメル運動に直接参加する画家や、渡米して抽象表現主義の作家と交流し、その影響を受けた画家等もいる。またピカソと比較される画家として名前が挙がることの多いマティスに加えてパウル・クレーを取り上げ、クレーに注目する美術関係者が増えていく。ピカソ以後の新しい若手作家たちの台頭や、美術市場の急速な国際化、さらにはポップ・アートやヌーヴォー・レアリズム、コンセプチュアル・アートなどの新しい美術様式や概念が生まれるなかで、ピカソが過去の作家になってしまう懸念さえ出てくる。

さて、本号の「日本におけるピカソの第二次受容」では、第二次世界大戦後からピカソの晩年までの、彼の制作活動に沿って欧米での批評や美術動向を交えながら考察していきたい。戦後最初の大きな事件は、1951年に開催されたピカソ展(日本橋高島屋)であろう。ここからピカソの新たな境地である陶器や版画が紹介され、ピカソ芸術を討議する対談や座談会も美術雑誌等で組まれる。展覧会が催される度に、多くの美術関係者がピカソについて論じている。またピカソの超大作《ゲルニカ》を誘致出品させる大型のピカソ展の実現に向けての準備も進められていた。

戦後の日本でキュビズムはいかに理解されたのだろうか。これまでのように、日本の美術家たちによるピカソの豹変する造形表現を追及することだけで、ピカソを本当に捉えることができるのだろうか。H.G.クルーザー監督の美術映画<sup>1)</sup>やD.D.ダンカン撮影による写真集<sup>2)</sup>で、ピカソの近況の制作活動やピカソ秘蔵の未公開作品が紹介されるようになり、J.D.サリンジャーも短編小説<sup>3)</sup>のなかでピカソに触れている。こうしてピカソが一般に広く知られていくなかで、ピカソの新しいイメージを第二次受容のなかで浮き彫りにしたいと思う。

現在、国内では約60館近い美術館<sup>4)</sup>がピカソ作品を所蔵しているが、戦後の受け容れのルートはどうであったか。当館は《腕を組んですわるサルタンバンク》(1923年、Z.V:15)(fig.1)を1980年にサザビー・ニューヨークのオークションで購入し話題になった。当時の紙面は、「ピカソ、6億9千

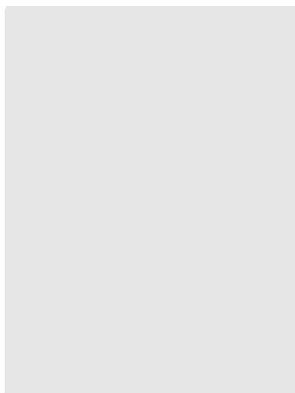


fig.1  
ピカソ 《腕を組んですわるサルタンバンク》  
1923年 プリヂストン美術館

万円「軽業師」ブリヂストン美術館が落札』『読売新聞』<sup>5)</sup>等が取り上げており、海外でも「A Picasso Goes For \$3 Million At Record Sale」『ニューヨーク・タイムズ』(5月13日)をはじめ、フランスやドイツ各国の主要な新聞<sup>6)</sup>でも報じられている。仲介をした山本進氏が当時を振り返り、オークションでの緊張と感動を臨場感をこめた文章で、『コレクションの新地平』(昨年当館で開催した展覧会図録)に記している<sup>7)</sup>。また日本企業が一時所有していたピカソの青の時代の代表作で、現在は海外へ流出した可能性の高い『ピエレットの婚礼』(1905年、Z.I.212)は、1990年に横浜美術館で展示公開<sup>8)</sup>されたこともあり、まだ我々の記憶に新しい出来事である。このようにピカソ没後の現在でも、なお日本におけるピカソの受容は様々な形をとって継続しているのである。

戦後の日本には世界の美術情勢を知らせるニュースが戦前とは比べようのないほど早く伝わってくるが、日本美術界はピカソの制作活動にどのように反応し、批評家や芸術家はいかにピカソを捉えて、次なる芸術へと引き継いでいくのかを検証したいと思う。ところで戦後のピカソに関わる文献は膨大な件数にのぼるため、順序は逆になるが、今回は美術雑誌、新聞紙面等に取り上げられた文献を中心に、彼が没する1973年迄をまとめた年表だけを掲載することにし、具体的な内容は次号の本文で論じることにした。

以下は注釈

- 1) H.G.クルーゾー監督、映画「ピカソ・天才の秘密」1955年撮影、1956年5月にカンヌ映画祭、1957年に東京で公開。
- 2) D.D.ダンカン「ピカソのピカソ」1961年、ビブリオテック・デザール社。500点以上のピカソ秘蔵の未公開作品集。
- 3) J.D.サリンジャー、繁尾久訳「ド・ドミエ・スミスの青の時代」『サリンジャー選集4巻 九つ物語』荒地出版社、1969年(初出：De Daumier-Smith's Blue Period、1953)
- 4) 2007年の調査では、ピカソの油彩、水彩、デッサン、版画、彫刻、陶器等を所蔵している全国の美術館等は58館である。所蔵先は次の通り：愛知県美術館、青山ユニマット美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館、荒井記念美術館、池田20世紀美術館、いわき市立美術館、上原近代美術館、大川美術館、大原美術館、おかざき世界子ども美術博物館、鹿児島市立美術館、笠間日動美術館、香川県文化会館、神奈川

県立近代美術館、川村記念美術館、北九州市立美術館、北野美術館、京都国立近代美術館、熊本県立美術館、群馬県立館林美術館、群馬県立近代美術館、国立国際美術館、国立西洋美術館、埼玉県立近代美術館、サントリー美術館、滋賀県立近代美術館、損保ジャパン東郷青児美術館、高松市美術館、玉川近代美術館、彫刻の森美術館、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、徳島県立近代美術館、富山県立近代美術館、長崎県美術館、長島美術館、新潟市美術館、ニューオータニ美術館、姫路市立美術館、兵庫県立近代美術館、ひろしま美術館、広島県立美術館、福井県立美術館、福島県立美術館、ブリヂストン美術館、ポーラ美術館、町田市立国際版画美術館、松岡美術館、松下美術館、三重県立美術館、宮城県美術館、宮崎県立美術館、村内美術館、メナード美術館、諸橋近代美術館、山形美術館、横浜美術館、和歌山県立近代美術館。

- 5) 1980年5月13日付、各紙は次の通りである。「ピカソ7億円で落札」『朝日新聞』、『『ピカソ』6億9千万円で落札 競売史上4番目』『東京新聞』、「ピカソ、6億9千万円「軽業師」ブリヂストン美術館が落札」『読売新聞』等
- 6) 「Vents Records à New York」『ル・モンド』(5月15日)、「Das Bridgestone Museum, Tokio Ein Privatmuseum mit gemischter Sammlung」『Handelsblatt』(6月21日)
- 7) 山本進「慧眼の収集家 石橋幹一郎」『コレクションの新地平 20世紀の息吹』ブリヂストン美術館、2008年、pp.118-119
- 8) この作品が出品された展覧会は「バルセロナ特別美術展 20世紀の巨匠ピカソ、ミロ、ゴンサレス」(バルセロナ&ヨコハマシティ・クリエーション実行委員会、1990年、cat. no. 7)で会場は横浜美術館である。

日本におけるピカソの受容略年表 (1946-1973年)  
は次頁より掲載

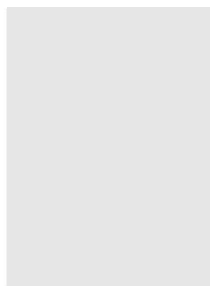
日本におけるピカソの受容略年表(1946－1973年)

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
1946年 (昭和21)	9月  々	末松正樹 バリ解放後最初のサロン・ドートンヌにピカソの作品が展示され、フランス絵画の革命的意欲を示したと述べる。◇「現代フランス繪畫」『みづゑ』no.493 岡鹿之助、大兼実、大久保泰、末松正樹、田近憲三 ピカソのサロン・ドートンヌ出品、共産党入党などについて。◇「最近のフランス美術界を語る(座談会)」『みづゑ』no.493 ○文部省主催第1回日本美術展覧会(日展) ◎日本国憲法公布	2～3月、パリの国立近代美術館で開催された「芸術とレジスタンス展」に《納骨堂》《スペイン人への記念碑》を出品する。4月下旬、フランソワーズ・ジローと同棲を始める。8月、アンティープ美術館学芸員のロミユアル・ドル・ド・ラ・スシェールから館内に制作用スペースを提供され、制作する。
1947年 (昭和22)	5月  7～8月	和田定夫 ピカソをめぐる大問題になった1945年秋のロンドンで開かれた現代フランス絵画展について。◇「ピカソに就いて」『アトリエ』no.248 瀧口修造 ピカソと英国詩人 S. スペンダーについて。◇「最近のピカソとキリコ」『アトリエ』no.250(7、8月号) ○「前衛美術会」結成、日本美術会協会主催の「第1回アンデパンダン展」開催	5月15日、フランソワーズとの間に息子クロードが生まれる。6月、フランソワーズとクロードを連れて、ゴルフ＝ジュアンへ行く。8月、ヴァロリスのマドゥーラ陶房、ジョルジュ・ラミエの窯で陶芸を始める。
1948年 (昭和23)	2月  4月  9月  9～10月  々  10月  11月  々  11月23日	長谷川三郎 アメリカの抽象絵画へのピカソの影響を論じる。◇「新芸術」『みづゑ』no.508 益田義信 ピカソの戦後の近況などについて。◇「ピカソ」『美術手帳』no.4 ピカソの製陶紹介 海外ニュースでヴァロリスでのピカソの陶器制作について紹介する。◇「海外ニュース 製陶に熱中するピカソ」『美術手帳』no.9 土方定一 欧米で評判のピカソを例に取り上げ、日本には青年美術家の良心の柱となる作家がいないと懸念する。◇「通貨及び良心としての美術」『みづゑ』no.515(9、10月合併号) 宮坂勝 ピカソの裸婦立像の構成について。◇「フォルムの問題の中からーピカソ・ドランを例にしつつ」『みづゑ』no.515(9、10月合併号) ピカソの話題 海外ニュースでピカソが8月ワルソーで開催された平和会議に出席したことを紹介する。◇「海外ニュース ピカソが世界の平和評定」『美術手帳』no.10 長谷川三郎 ピカソ論の最後に「私はピカソを好きになりつつある」と述べる。◇「ピカソ雑記」『みづゑ』no.516 柳亮 二科と新制作派の展評で「ピカソ模様のアロハシャツを着こんで得意がっている」と批評する。◇「秋の展覧会総評ー9月の部」『みづゑ』no.516 ピカソの話題 ゴルフ＝ジュアンで生活するピカソに対して、土地の陶工師がピカソを排撃する陶器を作り、人気を呼ぶ。◇「ピカソ排撃運動起る」『朝日新聞』11月23日 ○『美術手帳』創刊	ベルギーの映画監督ポール・アザールがヴァロリスとアンティープのピカソ美術館で記録映画「ピカソ訪問」を撮影制作する。8月25日、国際平和会議に出席するため、ポール・エリュアールとポーランドのヴロツワフ、クラクフ、アウシュヴィッツを訪れる。9月、ポーランド共和国大統領から勲章を授与される。
1949年 (昭和24)	1月  々  々  々  々  々	梅原龍三郎 モンマルトルのピカソを訪問した頃のことを回想する。◇「滞欧雑談」『美術手帳』no.13 三雲祥之助 ピカソの《女と猫》(1941年)について、原始的なフォルムと近代的な色彩感覚で構成されていると評する。◇「作品解説」『美術手帳』no.13 瀧口修造 ピカソのアンティープ生活や、ロシアのピカソ批判について。◇「戦後のピカソと制作」『アトリエ』no.264 齊藤義重 ピカソの作品に見られるヒューマニティについて。◇「ピカソとヒューマニティ」『アトリエ』no.264 和田定夫 今年の二科展にピカソにそっくりの作品が出ていることについて。◇「ANTIPOLIS」『アトリエ』no.264 福沢一郎、吉川逸治、植村鷹千代 ピカソ芸術について、立	パリで開かれた国際平和会議のポスターに鳩を描いたピカソのリトグラフが使用される。4月19日、フランソワーズとの間に娘が生まれ、ポスターの「平和の鳩」にちなんで、パロマ(スペイン語で鳩を意味する)と名付ける。

	2月	体派、シュルレアリスム、ピカソの豹変や限界について討論する。◇「ピカソと現代絵画（鼎談）」『アトリエ』no.264	
	4月	水谷乙吉 製陶するピカソは本質的形体を破壊することをやっていないと述べる。◇「ヴァローリスのピカソ」『アトリエ』no.265	
	5月	瀧口修造 ピカソの陶器に描かれた鳥獣魚介はアンティープの「生きる喜び」の世界であると述べる。◇「ピカソの陶器」『美術手帳』no.16	
	5月	荻須高徳 バリの現代美術館を紹介し、ピカソの作品の額装や寄贈について述べる。◇「バリ特信 バリの現代美術館」『美術手帳』no.17	
	◇	柳亮 ピカソの《室内》の作品について。◇「絵の秘密 ピカソによる絵画の解体と再構成」『美術手帳』no.17	
	6月	今泉篤男 ピカソの作品には美術の慣用の言語を阻もうとする一種の意地悪さがあると述べる。◇「ピカソの「意地悪さ」」『アトリエ』no.269	
	8月	須磨彌吉郎 ピカソこそスペイン画家中の最もスペイン的な人物であると述べる。◇「スペイン芸術精神史」みすず書房	
	10月	岡本太郎 ピカソの世代の芸術家の限界について述べる。◇「ピカソ芸術の表裏」『アトリエ』no.273	
	◇	瀧口修造 ピカソの最近の詩（『ヴェルヴ』特集号に発表）について。◇「ピカソの詩」『アトリエ』no.273	
	◇	和田定夫 ピカソの東洋性や、ピカソに関する文献について。◇「ピカソ雑記」『アトリエ』no.273	
	◇	江川和彦 ピカソの作品とジョージ・キープスの「視覚言語」という原理との相互関係について。◇「近代絵画の要素としての光と色」『アトリエ』no.273	
		○「第1回読売アンデパンダン展」開催	
1950年 (昭和25)	3月	高田博厚 世界平和会議のピカソの鳩のポスターに墨絵的感覚が見られると述べる。◇「この頃・2」『みづゑ』no.533	10月、イギリスのシェフィールドで開催される第2回国際平和会議に出席する。
	◇	元木恵 ピカソが描いたサバルテスの肖像画について。◇「ピカソの描いた五つの顔」『アトリエ』no.278	る。11月、レーニン平和賞を受賞する。
	3月5日	ピカソの話題 アメリカはピカソら世界平和擁護大会の代表が共産党員であるという理由で入国を拒否した。◇「米ピカソ入国拒否」『朝日新聞』3月5日	
	4月	松谷彊 東欧諸国でのピカソの評価について。◇「ブルガリアにおける現代フランス美術」『BBBB』	
	7月	長谷川三郎 アメリカの新しい作家の間では、パウル・クレイの方がピカソ以上の影響力を示しつつあると述べる。◇「訪問記 イサム・ノグチと会う」『美術手帳』no.31	
	◇	荻須高徳 フランスよりもアメリカや日本の方がマティスやピカソの近作紹介が早いと述べる。◇「フランス通信 希望を求めて」『美術手帳』no.31	
	10月	岡本太郎 ピカソのデッサンを見るときに考慮しなければならないことについて。◇「ピカソのデッサン」『アトリエ』no.285	
		○『芸術新潮』創刊	◎6月25日、朝鮮戦争勃発
1951年 (昭和26)	1月	益田義信 ピカソの陶器は今までの彼の芸術の結果であると述べる。◇「陶工ピカソ」『芸術新潮』no.13	1月18日、《朝鮮の虐殺》を制作する。
	3月	ピカソの陶器展初公開 上野松坂屋で文藝春秋新社主催によるピカソ陶器石版画展が催され、ピカソの陶器が初公開される。	この作品は5月のパリのサロン・ド・メに出品される。6月25日、ヴァンスにマティスの装飾したロザリオ礼拝堂が献堂され、式典が行われる。ピカソは寝たきりのマティスを見舞う。9月16
	3月18日	天声人語 陶器の既成概念からピカソの陶器について評する。	



年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	4月	◇「天声人語」『朝日新聞』3月18日 今泉篤男 ピカソにとっては、絵のことを言葉で話しても面白くないことは事実だと述べる。◇「ピカソの言葉」『アトリエ』no.291	日、ヴァロリスで《夜景》を描く。
	5月	佐藤敬 ピカソの陶器展が開催されたことについて。◇「ピカソの陶器」『みつゑ』no.548	
	〃	福島繁太郎 ピカソの風景画について《生木と枯木のある風景》を例に上げて論じる。◇「ピカソの風景画」『別冊文藝春秋』21号	
	〃	益田義信 「鐵齋、梅原(龍三郎)、ピカソ何れの場合も芸術が生活であり、生活が芸術なのである」と述べる。◇「芸術と遊び」『別冊文藝春秋』21号	
	〃	青山二郎 ピカソの陶器展に対する批評について提言する。◇「ピカソの陶器」『芸術新潮』no.17	
	6月	菊池一雄 ピカソの彫刻は素朴で健康な原始芸術の香りがすると批評する。◇「ピカソの彫刻」『芸術新潮』no.18	
	7月	福島繁太郎 ピカソの初期時代の評伝を紹介する。◇「若きピカソ」『芸術新潮』no.19	
	7～9月	吉川逸治 ヴァロリスのピカソを訪問する。◇「ピカソに会う」『みつゑ』no.558、1952年	
	8月	ピカソ作品展 日本橋高島屋で読売新聞社主催によるピカソ展が開かれる。大阪、京都の市立美術館、大原美術館へ巡回。出品された油彩16点には《頭蓋骨のある静物》(現在、大原美術館所蔵)や《花束となす》(《茄子》のこと、現在ブリヂストン美術館所蔵)などが含まれる。◇「志水楠男と南画廊」『志水楠男と南画廊』刊行会、1985年	
	8月25日	ピカソの夕 ピカソ芸術について富永惣一、福沢一郎、M.ピアチエンチニ、益田義信らが講演する。(読売ホール)	
	8月26日	大久保泰 日本画壇へのピカソの影響を批評する。◇「ピカソと日本画壇」『読売ウィークリー』8月26日	
	9月9日	野口彌太郎 ピカソ展を見て、ピカソの近作にはスペインの伝統が続いていると述べる。◇「ピカソの伝統」『読売ウィークリー』9月9日	
	〃	岡本太郎 ピカソに挑み、乗り越えることが我々の直面する課題であると宣言する。◇「ピカソの藝術」『アトリエ』no.298(臨時増刊)	
	〃	麻生三郎 ピカソについて「ピカソは合理主義の権化」と述べる。◇「健康なピカソ」『自由美術』第9号	
	〃	駒井哲郎 ピカソの1946～49年制作の石版画について、心をゆすぶられると述べる。◇「ピカソの石版画」『芸術新潮』no.21	
	〃	益田義信 ピカソ芸術における「物(オブジェ)」の持つ意味について論じる。◇「ピカソと「物(オブジェ)」」『芸術新潮』no.21	
	〃	川喜多長政 カンヌ映画祭を機に、ヴァロリスのピカソの陶器工房を見学し、印象を述べる。◇「欧州映画人と語る」『芸術新潮』no.21	
	〃	福島慶子 アンティープの考古館がピカソ美術館になってしまったことに対する地元の民衆の批判を述べる。◇「アンティープとピカソ美術館」『芸術新潮』no.21	
	〃	大久保泰 ピカソの初期から現代(当時)までの評伝を述べる。◇「目で見えるピカソの歴史」『芸術新潮』no.21	



「ピカソ展」図録(1951年)、東京都現代美術館蔵

10月	山口蓬春、福島繁太郎、岡本太郎、倉林正蔵 1938年以降の作品を中心にしたピカソ展を批評する。◇「座談会 ピカソ展」『芸術新潮』no.22
✕	福田恆存 アンチ・ピカソの立場からピカソ展を批評する。◇「只今ピカソ休憩中」『芸術新潮』no.22
✕	高見順 共産党員のピカソの絵がコミュニスト画家の絵というものかどうか疑問であると述べる。◇「只今ピカソ礼讃中」『芸術新潮』no.22
✕	佐藤敬 ピカソ展に出品された挿絵本について評する。◇「ピカソのさしえ」『芸術新潮』no.22
✕	勝見勝 ピカソの作品には、イメージの重量感と密度が迫ってくると述べる。◇「ピカソのリトグラフィ」『アトリエ』no.299
✕	柳亮 順応するマティスに対して、抵抗するピカソについて。◇「抵抗するピカソ」『みづゑ』no.554
✕	福沢一郎 ピカソから啓示として受けるものは、作品の模倣でなく反逆精神の体得であると述べる。◇「ピカソのグワッシュ、クレヨン、石版画」『みづゑ』no.554
✕	長谷川三郎 老ピカソと陶器のつながりの中にある深い意味を見逃してはならないと述べる。◇「陶工ピカソ・雑感」『みづゑ』no.554
✕	今泉篤男 ピカソは彫刻にあっても絵画的であると述べる。◇「ピカソの近作彫刻」『みづゑ』no.554
10月15日	小穴隆一 ピカソ展に対する女性の反応についての身辺雑記。◇「ピカソを嫌った人」『東京タイムズ』10月15日
11月	福沢一郎 「ピカソ展」(読売新聞社、日本橋高島屋)で見たピカソ作品の技法について。◇「ピカソの技術」『みづゑ』no.555
✕	川島理一郎 アンティープ美術館のピカソ作品について述べる。内部のスケッチをする。◇「アンチープ」『みづゑ』no.555
✕	サトウ・ハチロー 青の時代以降のピカソは親しめない画家だと述べる。◇「庶民のピカソ感」『芸術新潮』no.23
11月12日	土方定一 ピカソ展に出品されている《女の顔》(現在ブリヂストン美術館蔵)について評する。◇「優美な名画『女の顔』」『読売新聞』11月12日
✕	碓伊之助 ピカソ展に出品された《肘掛椅子の女》《鳩》《茄子と花》について評する。◇「東京のピカソ展」『読売新聞』11月12日
✕	富永惣一 ピカソは70歳という老齢に沈まず、創造の営みをつづける造型の鬼というべき存在であると述べる。◇「巨匠ピカソの歩んだ道」『読売新聞』11月12日
12月	徳大寺公英 佐藤敬の《ピアノと子供》の作品とピカソとの類似性を取り上げ、新制作派全体の性質を述べる。◇「秋季展覧会評」『みづゑ』no.556
✕	富永惣一 ピカソの《女の顔》(ブリヂストン美術館蔵)について述べる。◇「絵画的プロムナードブリヂストン美術館開館に際して」『みづゑ』no.556
✕	今田出海、福田恆存、三島由紀夫、河盛好蔵 マティス展、ピカソ展による影響について討議する。◇「1951年の芸術界 座談会」『芸術新潮』no.24
✕	佐藤敬 「ピカソ訪問」、「ルノワールからピカソまで」の美術映画について述べる。◇「映画・ピカソ訪問」『芸術新潮』no.24

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	12月	武者小路実篤、徳川夢聲 ピカソに会ったことなど回想する。 ◇「対談 武者小路実篤素描」『芸術新潮』no.24 ○「現代フランス美術展」(1950年のサロン・ド・メの日本展)開催 実験工房結成 神奈川県立近代美術館開館	
1952年 (昭和27)	2月	梅原龍三郎、安井曾太郎、福島繁太郎 安井はピカソの晩年の作品に感心すると述べる。◇「西洋絵画史(座談会)」『芸術新潮』no.26	2～3月、ニューヨークのカート・ヴァランティン画廊で、ピカソ展が開催される。4月、ピカソは、ヴァロリスにある古い礼拝堂を飾るために、戦争と平和の2枚の板絵の構想を練る。10月下旬、フランソワーズとの関係が悪化する。11月18日、友人で詩人のポール・エリュアールが死去する。
	3月	植村鷹千代 前衛的美術家たちのピカソ観の変化について。 ◇「1951年のピカソ」『芸術新潮』no.27	
	々	山尾薫明 ピカソの抽象模様や陶器、彫刻などの表現様式へのインカ出土品の影響について。◇「ピカソとインカの壺」『芸術新潮』no.27	
	々	植村鷹千代 フランスの若手作家たちのピカソ観について。 ◇「ピカソへの課題」『アトリエ』no.304	
	5月	瀧口修造 抽象絵画の解説のなかでピカソの光を使って描いたデッサンについて触れる。◇「アブストラクト時代」『芸術新潮』no.29	
	6月	谷口雅彦 三角形の構成による技法を発明した日本画家の谷角日沙春について紹介する。◇「日本画のピカソ」『芸術新潮』no.30	
	8月	大島辰雄 ピカソの《ゲルニカ》と丸木・赤松夫妻の《原爆の図》とを比較し、ピカソの《平和の顔》に対する作品はなにかについて。◇「ピカソ「平和の顔」に寄せて」『みづゑ』no.564 ○ブリヂストン美術館開館 国立近代美術館開館	
1953年 (昭和28)	1月	安倍公房 今までピカソの変貌の底をつらぬく明快なピカソ論がないと述べる。◇「ピカソのリアリティ」『アトリエ』no.314	1月、パリの国立近代美術館で「1907-14年のキュビズム展」が開かれ、《アヴィニヨンの娘たち》が1937年来初めてヨーロッパで公開される。3月5日、スターリン死去。アラゴンがピカソに『レ・レットル・フランセーズ』誌に掲載するスターリンの肖像画を依頼する。同誌(3月12-19日)に載ったこの肖像画に対し、フランス共産党はピカソに抗議する。5～7月、ローマ国立近代美術館で、大回顧展が開かれる。
	4月	植村鷹千代 丸木位里と赤松俊子の共同作《原爆の図》とピカソの《朝鮮戦争》を比較し、戦争表現の違いについて述べる。◇「近代性とクリマ」『みづゑ』no.572	8月、ベルビニャンでジャックリース・ロックと出会う。9月末、フランソワーズは二人の子供クロードとパロマを連れてピカソのもとを去る。9月、ローマの大回顧展は、ミラノのパラッツォ・レアルに会場を移し、《ゲルニカ》《納骨堂》《朝鮮の虐殺》《戦争と平和》も追加される。11月末から翌年2月初めまで「画家とモデル」を主題に一連のデッサン180点を制作する。
	々	関口俊吾 パリの国立近代美術館で開催された「キュビズム展」でピカソの《アヴィニヨンの娘たち》が30年ぶりにパリへ来たこと知らせる。◇「春のパリ美術展1953」『みづゑ』no.572	
	5月	神原泰 ピカソの青の時代について、アポリネールや、批評家、研究者の論考を引用して論じる。この時代の主要作品40点を列挙する。◇「ピカソ“青の時代”についてーピカソ青の時代特集」『みづゑ』no.573	
	7月	岡本太郎 ヴァロリスのピカソを訪問し、ピカソとの対話を紹介する。◇「ピカソに喰いさがる」『芸術新潮』no.43	
	々	柳亮 日本の現代美術をグローバルな視点で論じ、ピカソを超える作家としてビュッフェに注目する。◇「日本国際美術展 擬似コンクールと日本人のたちうち」『美術手帳』no.71	
	々	三雲祥之助 日本国際美術展に出品されたピカソの《青いコルサージュの女》(1942年)について評する。◇「フランスとメキシコの作品」『美術手帳』no.71	
	8月	柳亮、関口俊吾 5月にパリのルイズ・レリス画廊で開かれたピカソの1950～53年の近作展について。柳はピカソの芸術には「聖なるものと邪なるもの」が共存していると述べる。◇「ピカソ近作展より」、『フランス通信』『みづゑ』no.576	
	8月24日	富永惣一 ピカソ《茄子》(ブリヂストン美術館蔵)を自在な	

		形象の面白味をさらさらと示していると評する。◇「名作鑑賞ブリヂストン美術館から」『朝日新聞』8月24日	
1954年 (昭和29)	9月 々	北大路魯山人 関口俊吾と共にピカソを訪問し、ピカソの処世術に興味を抱く。◇「ピカソ会見記」『芸術新潮』no.57 岡本太郎 ピカソ大回顧展(ローマ)で見た《戦争と平和》について解説する。◇「ピカソの戦争と平和」『芸術新潮』no.57 ○具体美術協会結成	4月、シルヴェット・ダヴィッドをモデルに40点ほどのデッサンや油彩画を描く。11月末から、ドラクロワの《アルジェの女たち》を下敷きにしたシリーズを制作する。 ○11月3日、マティス死去
1955年 (昭和30)	1月 々 々 々 々 々 5月 7月 8月 9月 々 12月 々	東郷青児 「ピカシズムのあの非情なエネルギーには受け止めることの出来ない冷たさがあった」と述べる。◇「ダダイズムと未来派」『美術手帳』no.90 伊原宇三郎 留学中、一時期ピカソにまるで憑かれたようになったと述べる。◇「ピカソに憑かれる」『美術手帳』no.90 山口長男 留学中、ローザンバール画廊へピカソやブラック、レジェを見に行き、元気つけられたと述べる。◇「プリミティブから近代造形へ」『美術手帳』no.90 岡本太郎 留学中、ピカソの抽象作品を見て抽象画を描き始めると述べる。◇「古い殻を脱ぎずて」『美術手帳』no.90 今井俊満 ピカソら20世紀絵画、抽象絵画を経て、今後いかに受け継がれ発展するかが課題であると述べる。◇「戦後のパリに生きる」『美術手帳』no.90 岡本謙次郎『ヴェルヴ』に紹介された180点のデッサンについて。◇「ピカソ・人間喜劇」『芸術新潮』no.61 宇佐美英治 ピカソが1953～54年にかけて描いた「画家とモデル」のシリーズのデッサンについて論じる。◇「ピカソの近作デッサン」『みづゑ』no.598 東郷青児 ピカソのめまぐるしい飛躍について論じる。◇「企業家ピカソ」『芸術新潮』no.67 海藤日出男、植村鷹千代、徳大寺公英 フランスでは、ピカソ、レジェが頂点にあることについて討議する。◇「座談会・ピカソを乗り越えるもの」『美術手帳』no.98 今井俊満「我々はピカソから学んだ自由さとその前衛精神をうけつぎ発展させていかねばならない」と述べる。◇「20世紀に於けるピカソの位置」『美術手帳』no.99 神原泰 パリの装飾美術館で開催されたピカソの1900～55年までの大回顧展と国立図書館でのピカソの版画の回顧展について述べる。◇「パリにおけるピカソの二大回顧展と本年度の作品について」『みづゑ』no.602 ピカソの近況 ヴァロリスで「ピカソとヴァロリスの陶芸家展」が開催されたことを紹介する。◇「ヨーロッパの話題」『美術批評』 瀧口修造 エンメルが撮った映画「ピカソ」について紹介する。◇「美術映画雑記」『美術批評』 ○12月、安井曾太郎死去	2月11日、妻オルガの死去。6～10月、パリの装飾美術館で、「ピカソの絵画：1900-1955年」大回顧展が開かれる。 夏、ニースの映画撮影所ヴィクトリーヌ・スタジオで、アンリ=ジュルジュ・クルーズー監督により映画「ピカソ天才の神秘」が制作される。映画のなかで《ラ・グループの海辺で》と題する油彩画を2点描く。カンヌに、ラ・カリフォルニー荘を購入する。 ○1月、タンギー死去、8月、レジェ死去
1956年 (昭和31)	3月 5月 々	岡本太郎 今日の芸術の問題としてピカソが果たした役割を振り返る。◇「ピカソ」『芸術新潮』no.75 藤本東一良 昨年パリで開催されたピカソ展(装飾美術館と国立図書館)では三種類のポスターが街に張り出されていたと述べる。◇「フランスの展覧会ポスターと招待状・カタログ」『みづゑ』no.610 瀬木慎一 ピカソの《戦争》と《平和》の二対の作品について、ヨーロッパ絵画の主題「嬰兒虐殺」を想起すると述べる。◇「戦争と平和」『みづゑ』no.610	2月、《海辺の二人の女》を制作する。 9月、「水浴者」のテーマに着手する。 絵のなかの人物たちを木板を使って彫刻にし、のちにブロンズで鋳造する。 10月25日、ヴァロリスのマドゥーラ陶房でピカソ75歳の誕生日を祝う。

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	9月	小林秀雄、吉川逸治 映画を通してピカソの芸術を理解することについて。◇「映画「ピカソ・天才の秘密」対談」『芸術新潮』no.81	
	11月	福島繁太郎らピカソ訪問 福島は梅原龍三郎、香月泰男らとカンヌに住むピカソを訪問する。◇『戦後洋画と福島繁太郎』山口県立美術館、1991年 ○「世界・今日の美術」展(日本橋高島屋)、アンフォルメル の紹介	
1957年 (昭和32)	2月	鶴岡政男 ピカソの陶板画には東洋に関心をもつ最近の彼の傾向が見られると述べる。◇「ピカソの陶板画」『芸術新潮』no.86	3～4月、パリのルイズ・レリス画廊で、ピカソの1955～56年に制作された作品が展示される。5～9月、ニューヨーク近代美術館でピカソの生誕75年展が催される。この展覧会は、シカゴ、フィラデルフィアへ巡回する。8月、ラ・カルフォルニーでベラスケスの《ラス・メニーナス》をもとにした連作を制作する。秋、ユネスコからパリのユネスコ本部のラウンジを飾る壁画を依頼される。
	ク	梅原龍三郎 福島繁太郎夫妻、香月泰男らとカンヌのピカソを訪問したことについて。◇「婦朝放談」『芸術新潮』no.86	
	ク	船戸洪 バリ便は“ピカソの時代は終わった”“サロン・ド・メは過去のサロンと化した”と伝えた述べる。◇「パリで売れる日本人画家」『芸術新潮』no.86	
	4月	宇佐美英治 ピカソとレジェは対照的な存在であると述べる。◇「ピカソとレジェ」『みづゑ』no.621	
	5月	ピカソ版画展 神奈川県立近代美術館でピカソの版画展が開催され、石橋美術館など10カ所を巡回。プリヂストン美術館では9月に開催する。	
	ク	東野芳明 ピカソの《食事》(1953年)には、素裸かな人間の生命力のドラマがあると述べる。◇「原色版解説 ピカソ《食事》」『美術手帳』no.125	
	ク	針生一郎、岡本太郎、羽仁進 ピカソは日本の現状では早すぎる、赤旗ならばわかるということについて討議する。◇「座談会 美術と大衆」『美術手帳』no.125	
	ク	ピカソの近況 パリのセーム左岸の画廊で開催されたピカソの回顧展に“ジエモ”技法で制作した作品が出品された。◇「海外ニュース ピカソの“ジエモ”による回顧展」『美術手帳』no.125	
	5月22日	瀧口修造 わからない絵の代表のようなピカソ、親しみ深い人間的なピカソ、大衆の手の届かないピカソ…いろいろなピカソがあると述べる。◇「ピカソの魅力 版画展と映画をめぐって」『朝日新聞』5月22日	
	5月23日	難波田龍起 ピカソの作品にはユーモラスな面が大いにあって人を解放に向かわせるが、どこまでも人間との格闘が続くと述べる。◇「ピカソ版画展をみて 石版画を作り変えた力量」『東京新聞』5月23日	
	6月	H.G.クルウザー 『芸術新潮』と川喜多氏の依頼により、映画「ピカソ・天才の秘密」の制作について述べる。◇「カメラの前のピカソ」『芸術新潮』no.90	
	6月6日	中原佑介 ピカソは巨匠だが名匠とは言えないと批評する。◇「ピカソ版画展をみる」『読売新聞』(6月6日夕刊)	
	6月18～22日	ピカソ版画展から 版画展の紹介と出品作品の《渦巻き髪の女》《イタリアの女》《顔》《青春》の解説。◇「ピカソ展から①～④」『朝日新聞』6月18日、19日、21日、22日	
	7月	ピカソ・ブーム ピカソ版画展の開催やピカソの映画が封切られ、ピカソ・ブームとなる。「ピカソにおくる児童画」募集の社告が毎日新聞に載る。◇「展望台 ピカソ・ブーム」『美術手帳』no.128	
	ク	土方定一、柳亮、徳大寺公英、針生一郎 日本人は目の前で	

	7月	<p>ピカソが絵を描いているという実感がないと批評する。◇「座談会 世界の現代美術における民族性と風土の問題 第4回 日本国際美術展を観て」『美術手帳』no.128</p> <p>瀬木慎一 世界的な巨匠ピカソはロルジェ、ビュッフェ、ミノーラの「反ピカソ」のスローガンとなっていると述べる。◇「世界の美術批評家をめぐる三章」『美術手帳』no.128</p> <p>久保貞次郎 ピカソ版画展の展評で、日本の美術館が100点くらいのピカソの版画を今のうちに収集すべきだと述べる。◇「ピカソの版画」『美術手帳』no.128</p> <p>ピカソの近況 ルイズ・レリス画廊でピカソの76歳の誕生記念展が催され、ピカソがまた新しい道にふみこんだと展評する。◇「海外ニュース ピカソ76歳の誕生記念展」『美術手帳』no.128</p>	
	8月	<p>土方定一 4、5年前にパリのルイズ・レリス画廊で佐藤敬とピカソの版画展を見て以来、ピカソの版画に魅了され、ピカソの版画を「生命的な緊張感に満たされている」と述べる。◇「ピカソの版画」『みつる』no.625</p> <p>針生一郎 ピカソの《二人の裸婦》を「力感にみちたデフォルマションが、みごとな均衡を生みだしている」と述べる。◇「今年のサロン・ド・メ」『みつる』no.625</p>	
	9月	<p>小川マリ子 ピカソの《絵の中の果物》(1908年)はセザンヌ風で親しみやすいと述べる。◇「原色版解説 ピカソ《絵の中の果物》」『美術手帳』no.130</p>	
	10月	<p>針生一郎、今井俊満、山口勝弘 今井はパリ留学中(1952年)、日本的なものを取り去り、西欧の合理主義精神に触れたいと考える。ピカソの影響を受ける。◇「座談会 アンフォルメルをめぐって 西洋と東洋・伝統と現代」『美術手帳』no.131</p>	
	11月	<p>ピカソの近況 NBC テレビに出演するピカソについて。◇「海外ニュース テレビに出演するピカソ」『美術手帳』no.133</p>	
	12月	<p>ピカソの近況 ピカソ76歳の誕生記念展がルイズ・レリス画廊で催される。◇「海外の話題」『美術手帳』no.134</p> <p>瀧口修造 ピカソが手がけたビュッフェの『博物誌』の版画について解説する。◇「ピカソの素描」『芸術新潮』no.96</p> <p>○梅原龍三郎、芸術院会員を辞退する。</p>	
1958年 (昭和33)	1月	<p>改田昌道 ピカソの絵画制作の様子を漫画で紹介。◇「ピカソ 天才の秘密」『美術手帳』no.136</p>	1月29日、ユネスコの壁画のための最終的な習作を行う。3月29日、ヴァロリスの公立学校の校庭で、ユネスコの壁画の贈呈式が行われる。9月、エクス=アン=プロヴァンス近くに建つヴォーヴナルグ城を購入する。
	2月	<p>江原順 ピカソとアポリネールの出会いについて。◇「アポリネールと画家たち」『美術手帳』no.136</p>	
	3月	<p>白井浩司 サルトルのキュビズム言及について。◇「J.P. サルトル 実在主義的美術観」『美術手帳』no.138</p>	
	4月	<p>小林秀雄、吉川逸治 ピカソとクレーとの比較、ピカソの次にくるものなどを述べる。◇「ピカソ以後(対談)」『芸術新潮』no.100</p>	
	5月	<p>丸木俊子 1956~58年にかけてのロシア美術界でのピカソの評価について述べる。◇「ソヴェットのピカソ嫌い」『芸術新潮』no.100</p> <p>ピカソの話題 カーンワイラーが英紙『オブザーヴァー』に「ピカソ語録」を載せた記事について。◇「海外の話題 ピカソの怪気炎」『美術手帳』no.140</p> <p>D.D. ダンカン カメラマンのダンカンが撮影したカンヌのピカソの日常生活を解説付きで紹介する。◇「愛するピカソ」『芸術新潮』no.101</p>	

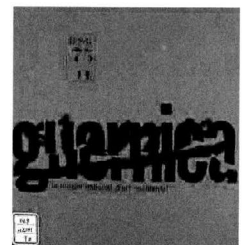
年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	5月	中山公男 サークスを主題にした芸術作品のなかで、ピカソが描く道化は「人間家族」の象徴であると述べる。◇「不滅の主題 道化とサーカスの造形史」『美術手帳』no.141	
	5、7月	ピカソの話題 パリのサン=ジェルマン=デ=プレの広場におけるピカソ作のアポリネール像の記念碑建立について。◇「海外の話題 ピカソ作 アポリネール像」『美術手帳』no.141 曾根元吉 ピカソがロシア・バレエの「バラード」の舞台装飾と衣装のデザインをしたことや、ピカソの新古典主義時代、キュビズムの作風との関係について述べる。◇「ピカソからコクトオへ」『みづゑ』no.635、「舞台転換のピカソ」『みづゑ』no.637	
	6月	ピカソの話題 ロシアで初めてのピカソ研究書、フランスでのピカソの陶器展について。◇「海外の話題 ピカソの話題 二つ」『美術手帳』no.142	
	7月	大島辰雄 アラゴンのピカソ《人間喜劇》論評などについて。◇「美術思潮周辺 ルイ・アラゴン 超現実主義から現実世界へ」『美術手帳』no.144	
	8月	瀬木慎一 カフカのピカソ批評などについて。◇「美術思潮周辺 フランツ・カフカ 表現派の絵画と不条理の作家」『美術手帳』no.145	
	9月	大久保泰 音楽を主題にした芸術作品のなかで、ピカソが描く牧神やピカソとギターについて取り上げる。◇「不滅の主題 楽器と奏者 色彩のフォルムと交響楽」『美術手帳』no.146	
	11月26日	ピカソの《母と子》 画商ローゼンバーク(ニューヨーク)がピカソの《母と子》(Z.XXI:290、現在個人所蔵、日本)に15万2千ドル(5,472万円)の高値をつけた。◇「高値をつけたピカソの「母と子」」『朝日新聞』11月26日	
	12月	東野芳明 パリの新ユネスコ本部講堂に描かれたピカソの壁画についてのフランス人の批評を述べる。◇「新ユネスコ本部の装飾」『みづゑ』no.643	
1959年 (昭和34)	3月	高橋新吉 ピカソの《宮女》はベラスケスの《ラス・メニーナス》を聯想することによってささえられていると述べる。◇「ピカソの「宮女」」『芸術新潮』no.111	2月、ヴォーヴナルグ城に1961年春まで制作と休養の日々を過ごす。5～6月、パリのルイズ・レリス画廊で『《ラス・メニーナス》1957年』展が開かれる。
	5、7～11月	高階秀爾ピカソ一流の剽窃について、「ピカソの剽窃」、「ピカソとモンマルトル」、「宮廷の侍女達」、「ゲルマンの誘惑」、「ラテン精神の伝統」、「戦争と平和」を論じる。◇「ピカソの剽窃」『みづゑ』no.648、650(7月号)、652～655(8～11月号)	6月5日、1941年作のドラ・マールのブロンズ像《女の頭部》が、アポリネールの記念碑としてサン=ジェルマン=デ=プレの墓地の庭に設置され、除幕式が行われる。
	8月	高階秀爾 世界各地で開かれるピカソ展を巨象を撫でる群盲にたとえる。◇「巨象と群盲 マルセユのピカソ展を見て」『美術手帳』no.161	8月、マネの《草上の昼食》をもとに作品を制作する。秋、リノカット(リノリウム版画)を実験的に試す。
	11月	三宅正太郎 加山四郎の絵画思想はピカソを見ることで根本からくつがえされると述べる。◇「加山四郎 滞欧青春賦」『美術手帳』no.106	
	12月	東野芳明 フォートリエの《人質》はゴヤの《戦禍》、ピカソの《ゲルニカ》と並べて3つめの正しい意味での「戦争画」であると述べる。◇「ピカソ以後の革命画家 フォートリエ」『美術手帳』no.165 ○国立西洋美術館開館	
1960年 (昭和35)	2月	今泉篤男、佐野繁次郎 ミロとピカソの関係について。◇「対談 ミロの芸術 造形の詩人」『美術手帳』no.169	7～9月、ロンドンのテート・ギャラリーでピカソ回顧展が開かれ、1895～



	2月	土方定一 ピカソの《ゲルニカ》を解説し、ピカソに限らず偉大な作家は時代の民衆のなかに沈潜しながら、そこから受けた精神の傷痕を記録すると述べる。◇「名画による人間の歴史」『芸術新潮』no.122	1959年にかけて制作された270点が出品される。カタログをローランド・ベンローズが担当する。
	3月	ピカソの近況 ピカソの1955年11月1日～1956年1月14日までの写生帖の複製「カリフォルニーの手帖」がセルクル・ダールから出版されることについて。◇「海外短信 ピカソの秘密をのぞかせる「手帖」」『美術手帳』no.170	
	々	生野幸吉 ピカソの《ゲルニカ》をミュンヘンの巡回展で見、異常な静寂に領されていて、別次元の空間だったと述べる。◇「モナ・リザとゲルニカ」『芸術新潮』no.123	
	5月	末松正樹、瀬木慎一 キュビストのレジェとピカソを比較する。◇「対談 レジェの芸術 ダイナミックな空間構成と未来像への確信」『美術手帳』no.173	
	6月	刀根山光人 カンヌのピカソに会う。◇「ミロ・ピカソ訪問記」『芸術新潮』no.126	
	7月	ピカソの近況 ピカソがフランス平和委員会資金のために陶皿の複製を許可したことについて。◇「手帖通信 ピカソの絵皿売り出す」『美術手帳』no.175	
	9月	ピカソの話題 ロンドンのテート・ギャラリーでピカソの大展覧会が開催され、王室一家も観覧した。◇「海外短信 ロンドンで最大のピカソ展」『美術手帳』no.178	
	10月	瀬木慎一 ロンドンの大ピカソ展についての報告。◇「話題をまいたロンドンの大ピカソ展」『美術手帳』no.179	
	々	三雲祥之助、中山公男 ブラックとピカソのキュビズムについて。◇「対談 ブラックの芸術 解体から総合へ」『美術手帳』no.179	
	々	20世紀フランス美術展 日仏文化交流の第2弾としてピカソ、ミロなど20世紀美術作品を紹介。国立西洋美術館、京都市美術館で開催する。	
	々	加藤正 ピカソが新たに始めたリノリウム版画について解説し、新しい出発を開始すると述べる。◇「ピカソのリノリウム版画」『芸術新潮』no.130	
1961年 (昭和36)	1月	東野芳明 若い世代がアメリカ絵画に自国の英雄を持ったこととモダン・アートのヒーローだったピカソとの関係を述べる。◇「開拓者の扼殺をめざして」『美術手帳』no.183	3月2日、ヴァロリスでジャックリーヌと結婚する。6月、ムージャンの村近くに新しく建てられたノートル＝ダム＝ド＝ヴィ＝荘に移る。
	々	徳大寺公英 ヨーロッパ美術界ではピカソの時代が去ったことを伝える。◇「伝統の歯車をかむ正系と異端」『美術手帳』no.183	
	々	ピカソの話題 バリ近代美術館で1960年11月～1961年1月23日迄、「20世紀の源泉」展が開かれ、20世紀美術を形造る基礎となる1,000点もの作品が展示される。ピカソの《アヴィニョンの娘たち》も出品される。◇「海外の話題 豊かな「20世紀の源泉」展」『美術手帳』no.183	
	々	岡本太郎、川北倫明、西脇順三郎 創造と破壊についてピカソなどの芸術を討論する。◇「座談会 伝統と革新」『美術ジャーナル』no.16	
	2月	ピカソ版画展 本間美術館	
	々	中原佑介、瀬木慎一、向井周太郎 運動と衝突についてピカソ芸術を討論する。◇「座談会 世界のなかの日本」『美術ジャーナル』no.17	
	3月	アンティープのピカソ美術館の紹介 ◇「特集・2 アンティープのピカソ美術館」『芸術新潮』no.135	

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	5月	ピカソ夫妻のグラフィア紹介 ◇「特集・2 ピカソの幸福な日」『芸術新潮』no.137	
	6月	小山田二郎、東野芳明 タマヨのピカソからの影響について。◇「対談 ルフィーノ・タマヨ 不信への挑戦」『美術手帳』no.190	
	8月	瀬木慎一、金子真珠郎 ポロックへのピカソの《ゲルニカ》の影響など。◇「対談 ポロック 複眼の視覚 偉大なる発見者」『美術手帳』no.192	
	ク	土方定一 画商ヴォラールとピカソについて。◇「近代画商の誕生」『美術手帳』no.192	
	ク	岡本太郎 ピカソの意味について。◇「作家の記憶 生き、仕事をしていく意味」『美術ジャーナル』no.23	
	9月	土方定一 ピカソと画商カーンワイラーについて。◇「呪術師 職人 美術家 ピカソの画商」『美術手帳』no.193	
	10月	ピカソ全貌シリーズ第1回版画展 アート・フレンド・アン・シエーション主催で日本橋・白木屋、京都、大阪を巡回。	
	11月	久保貞次郎 ピカソの初期のエッチングから近作のリノリウムの版画について。◇「ピカソの版画の見方」『みづゑ』no.680	
	ク	瀬木慎一 ピカソの版画の愛と暴力のテーマについて論じる。◇「愛と暴力」『みづゑ』no.680	
	ク	大岡信 ピカソの版画から詩作する。◇「ピカソのミノタウロス」『みづゑ』no.680	
	ク	岡本太郎 ピカソは自分にとって「芸術家」であり、「画家」ではないと述べる。◇「ピカソの魅力」『みづゑ』no.680	
	ク	神彰 ピカソの全貌版画展について。◇「私のピカソ観」『みづゑ』no.680	
	ク	駒井哲郎 ピカソはもともと現在の混沌とした抽象絵画とは無縁の画家と述べる。◇「技術にたいする過信」『みづゑ』no.680	
	ク	宮本三郎 ピカソが一つの主題のなかから抽出するものについて。◇「ピカソ版画展をみて」『みづゑ』no.680	
	ク	久保貞次郎 ピカソの版画展を見て、破壊はピカソの生命であると述べる。◇「特集・4 ピカソ版画の意味」『芸術新潮』no.143	
	ク	瀬木慎一 ピカソは、版画だけで美術史上に第一級に位置づけられる大芸術家だと述べる。◇「ピカソの版画 その全貌」『美術手帳』no.196	
	ク	ピカソ版画展 ピカソの1930～60年におよぶ304点の版画展の紹介。◇「ピカソ展より」『美術ジャーナル』no.26（11、12月合併号）	
	12月	M. フグレー（坂崎乙郎訳）ピカソは形体、クレーの制作の体質は色彩にあると述べる。◇「クレーとピカソ」『芸術新潮』no.144	
	ク	宇佐美英治、乗松巖 ジャコメッティとピカソのヴィジョンの違いについてなど。◇「対談 ジャコメッティの芸術 空虚の中の存在の実現」『美術手帳』no.197	
	ク	ピカソ展とクレー展 ピカソ展とクレー展が開催される。◇「クレー展とピカソ展 手帳通信」「デパート時評」『美術手帳』no.197	
1962年 （昭和37）	1月	ピカソの話題 D.D. ダンカンが撮影したピカソ秘蔵の作品集『ピカソのピカソ』について。◇「海外の話題 写真家 D.	1～2月、パリのルイズ・レリス画廊でヴォーヴナルグで1959～61年にかけて

		D. ダンカンと知られざるピカソ』『美術手帳』no.199	て制作した油彩画の展覧会が開催される。
1月		瀬木慎一 D.D. ダンカン撮影のピカソの未公開作品約500点の作品集が出版されたことで、ピカソの1930年代の全活動が明らかになったと述べる。◇「『ピカソ秘蔵のピカソ』現れる』『芸術新潮』no.145	4～5月、ポール・ローザンベールなどニューヨークの9つの画廊による「ピカソ、アメリカからの賛辞」展が開かれる。総作品数は390点で、カタログをジョン・リチャードソンが制作する。
2月21日		平林たい子 フランス共産党がピカソの除名を思いとまったことについて。◇「共産党と芸術家（下）』『読売新聞』2月21日	5月1日、二度目のレーニン平和賞を受賞する。5～9月、ニューヨーク近代美術館で「ピカソ生誕80年展」が開かれる。
3月		ヨシダ・ヨシエ 日本の戦争画に対して、ヨーロッパの画家が描いた目撃者としての戦争画の例としてピカソの作品を挙げる。◇「変革と批評』『美術ジャーナル』no.27	
4月		宮川淳 キュビズムとピカソの《アヴィニョンの娘たち》についてなど。◇「20世紀美術の視点4 1912年パリ』『美術手帳』no.202	
5月1日		ピカソ、レーニン平和賞受賞 ピカソは1961年度国際レーニン平和賞を受賞する。◇「ピカソら5人レーニン平和賞』『読売新聞』5月1日	
5月		ピカソの話題 ロンドンの競売でピカソの《道化師の死》と《庭にすわった女》に世界最高の値段がついた。◇「海外短信 ピカソ・世界最高の値段つく』『美術ジャーナル』no.29	
6月		東野芳明 パリのベルグリュエーエ画廊から出版された貼紙写真集「ディユルヌ」について。◇「ピカソの「日々の愉しみ」』『芸術新潮』no.150	
7月		瀬木慎一 ニューヨークの9つのギャラリーで開かれた「ピカソ展」を紹介し、アメリカでのピカソの受容について述べる。◇「アメリカにあるピカソ ニューヨークの大ピカソ展』『芸術新潮』no.151	
◇		ピカソの新作 ピカソの新作画集《昼食》について。◇「海外の話題 ピカソの新作「昼食」』『美術手帳』no.206	
◇		前衛美術会の声明 前衛美術会の発会式の声明文にピカソ、ダリ、マティスが取り上げられる。◇「現代日本の美術の底流 アヴァンギャルドの周辺』『美術ジャーナル』no.31	
9月		坂崎乙郎 芸術の政治的弾圧とピカソの《ゲルニカ》などについて。◇「20世紀美術の視点9 1937年ベルリン』『美術手帳』no.209	
10月		大岡信 ピカソの剽窃の最新作である《食事》のシリーズ(マネの《草上の昼食》を下敷きにしている)を解説する。◇「マネの「草上の宴」の変奏曲 ピカソの古典研究』『芸術新潮』no.154	
◇		金子真珠郎 サロン・ド・メに出品されたピカソの《横たわる女》について。◇「11年めにサロン・ド・メ展をむかえて ボンヌ・ニユイ・サロン・ド・メ』『美術手帳』no.210	
11月		ピカソ・ゲルニカ展 出品作品63点のうち1点はゲルニカのタペストリー。国立西洋美術館、久留米、名古屋を巡回。	
◇		大岡信 ピカソやミロは大西洋をこえて強い支配力を及ぼしていたと述べる。◇「1948年・ニューヨーク』『美術手帳』no.212	
◇		ピカソ・ゲルニカ展 今世紀の記念碑的作品《ゲルニカ》を紹介する展覧会について。◇「ピカソ・ゲルニカ展より』『美術ジャーナル』no.35 (11、12月合併号)	
◇		高階秀爾 ピカソは、マネの作品において古典的なものへの復帰を目指したのだろうかと述べる。◇「ピカソの剽窃—近作「草上の昼餐」』『みづゑ』no.693	



「ピカソ・ゲルニカ展」図録(1962年)

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
	11月24日	中原佑介 《ゲルニカ》をピカソの最大の傑作、ピカソ芸術の集大成と述べる。◇「ピカソ『ゲルニカ』展をみる」『読売新聞』11月24日	
	12月	藤松博 《ゲルニカ》の習作を「どうにもならなくなった人間の本当の姿を照らし出して、救いを求めている」と述べる。◇「ピカソのゲルニカ」『美術手帳』no.213	
	々	瀬木慎一 パリでピカソ展の準備をしていたことについて。◇「ピカソのゲルニカ」『三彩』no.157	
	々	大島辰雄 《ゲルニカ》はピカソのアポカリプスであると述べる。◇「ゲルニカ怒れるピカソ」『みづゑ』no.694	
1963年 (昭和38)	1月	曾根元吉 ピカソや同時代の芸術家、美術関係者との交流について。◇「20世紀の階段1～12」『美術手帳』no.215～229(1～12月号)	3月9日、バルセロナにピカソ美術館が開館する。
	2月	竹山道雄 《ゲルニカ》とその習作に殷周銅器を連想すると述べる。◇「東京のゲルニカ」『芸術新潮』no.158	
	々	ピカソの話題 ピカソはりファールのバレエの舞台装置デザインをする等。◇「海外の話題 ピカソをめぐる2つの話題」『美術手帳』no.216	
	3月	坂崎乙郎 ヘンリー・ムアの言葉を引用し、ピカソの作品には多分に表現過多、饒舌があると述べる。◇「『ゲルニカ』饒舌」『萌春』110号	
	5月	パブロ・ピカソ(大島辰雄訳編) 1920年代からのピカソの芸術談、ブルトンの「詩人ピカソ」(「ピカソ特集号」『カイエダール』1935年)、サバルテス著『ピカソ 肖像と思い出』(1946年)、『尻尾をつかまれた欲望』戯曲等を紹介。◇「傷ついたミノタウロスの独白Ⅰ～Ⅳ」『みづゑ』no.699、no.701～703(7～9月号)	
	5月17日	ピカソ《サビナ人の略奪》パリのサロン・ド・メにピカソが《サビナ人の略奪》を出品する。◇「パリ画壇の近況 サロン・ド・メを中心に」『朝日新聞』5月17日	
	11月	ピカソ・ゲルニカ展の入場者 石橋美術館の37年度館報によれば入場者最高は「ピカソ・ゲルニカ展」(22,186人)、最低は「第5回西日本洋画新人秀作展」(4,520人)、郷土の新人より、世界のピカソ。◇「手帳通信 美術館活動状況報告より」『美術手帳』no.228	○8月、ブラック死去。10月、コクトー死去。
1964年 (昭和39)	4月	高階秀爾 ラファエロの表現の仕方は、ピカソの芸術観と人間観とをよくわれわれに伝えていると述べる。◇「ピカソの剽窃—近作『画家とそのモデル』『サビニの女たちの掠奪』」『みづゑ』no.710	1～2月、パリのルイズ・レリス画廊で1962～63年の絵画展が催される。春、フランソワーズ・ジローがアメリカの美術批評家カートン・レイクと共同で『ピカソとの生活』を出版する。ブラッサイの回想録『語るピカソ』も出版される。
	々	ピカソの近況 パリのルイズ・レリス画廊でピカソの《画家とモデル》、《サビニの掠奪》などを展示する。◇「海外の話題 ピカソの『画家とモデル』」『美術手帳』no.234	
	々	江原順 1～2月にかけてルイズ・レリス画廊で催されたピカソ展を見て、幸福になったと所感を述べ、《サビニの掠奪》について論じる。◇「ピカソ1964年展」『芸術新潮』no.172	
	5～8月	ピカソ展・その芸術の70年 ピカソの1899～1963年までの作品の回顧展が東京国立近代美術館で開かれる。京都、名古屋へ巡回。	
	5月25日	カーンワイラーの講演会 ピカソ展を機に来日し、毎日ホールで講演する。◇「ピカソとの60年」『みづゑ』no.713	
	6月	大島辰雄(編) モーリス・レイナル、ポール・エリュアール、ギョーム・アポリネールなどのピカソに関する批評の紹介。	

	<p>6月 ◇「ピカソの歩み 巨匠をめぐる批評年代記」『みづゑ』no.712 生野幸吉 ピカソの青の時代について論考する。◇「青のピカソ」『芸術新潮』no.174</p> <p>6月5日 谷川俊太郎 ピカソは特殊ではなく、普通なのだと述べる。 ◇「ピカソ展をみる」『読売新聞』6月5日</p> <p>7月 G.ブーダイユ(小海永二訳) 東京開催のピカソ大回顧展への期待。◇「特集 ピカソ展 20世紀とピカソ」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ 江原順 戦後初めてサロンに出品したピカソについて。◇「特集 ピカソ展 1944年のサロン・ドートンヌとピカソ」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ 中原佑介 ピカソが日本に紹介されてから半世紀にわたるピカソ像について。◇「特集 ピカソ展 日本におけるピカソ像」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ ピカソの話題 美術関係者のピカソに対するアンケート調査など。◇「海外の話題 アンケート「ピカソ1964年」、ピカソのアトリエへの招待」『美術手帳』no.238</p> <p>◇ 宮川淳 ピカソを絵画の外で捉えようとすれば、必然的にピカソの芸術を見失ってしまうと論じる。◇「ピカソ芸術の70年」『美術手帳』(増刊)</p> <p>◇ 北園克衛 ピカソの彫刻に一貫して流れているのは、彼の詩や劇のような文学作品と同じように絵画的であると論じる。 ◇「画家ピカソのもうひとつの絵画」『美術手帳』(増刊)</p> <p>◇ 末永照和 ピカソと関係のあった詩人や芸術家たちについて。 ◇「ピカソと芸術家たち」『美術手帳』(増刊)</p> <p>◇ 瀬木慎一 ピカソの天才を支えてきた人々について。◇「ピカソを支えてきた人々」『美術手帳』(増刊)</p>	
1965年 (昭和40)	<p>1月 瀬木慎一 フランソワーズ・ジローの回想録『ピカソとの生活』の最終章の部分の文章の訳出を紹介する。◇「ピカソの裏側 ピカソとの愛の破綻」『芸術新潮』no.181</p> <p>3月 坂本繁二郎 《ゲルニカ》について、「ただ変な絵をこしらえただけで、どうしてあんなに有名になったかわからない」と述べる。◇「インタビュー “明治” 坂本繁二郎 きき手・東野芳明」『美術手帳』no.249</p> <p>4月 宗左近 ピカソの陶器の真贋問題について述べる。◇「複製だったピカソ陶器」『芸術新潮』no.184</p> <p>7月 ピカソの話題 F.ジローの回想録『ピカソとの生活』出版に対しての40人の芸術家たちによる抗議について。◇「海外の話題 裏切られたピカソ?」『美術手帳』no.254</p> <p>7月10日 高階秀爾 ピカソ以後50年、西洋と日本との現代絵画に意外に大きな落差があると述べる。◇「絵画における人間性探究」『読売新聞』7月10日</p> <p>8月 ピカソの話題 ピカソ画廊として知られるルイズ・レリス画廊さえ、無名の新人の個展を開く理由について。◇「海外の話題 新しいピカソは可能か」『美術手帳』no.256</p> <p>10月 渡辺武二郎 ピカソとの出会いを回想する。◇「わが胸の上のピカソ」『芸術新潮』no.190</p>	<p>6〜9月、トゥールーズのオーギュスタン美術館で「ピカソと舞台芸術」展が開かれる。11月、スイイで潰瘍の手術を受ける。パリにも立ち寄るが、これが最後のパリ滞在となる。</p> <p>◎ベトナム戦争始まる</p>
1966年 (昭和41)	<p>2月 ルイ・ゴルデーヌ他(辻邦生訳) ピカソへのインタビューについて。◇「巨匠訪問2 ピカソ」『美術手帳』no.263</p> <p>11月 曾根元吉 シチューキンとピカソ作品の収集について述べる。 ◇「蒐集家の栄光 シチューキンとモロゾフをめぐって」『みづゑ』no.742</p>	<p>9月28日、アンドレ・ブルトン死去。11月フランス政府主催のピカソ回顧展がグラン・パレ、プティ・パレで開催され、700点以上の作品が出品される。これに関連してパリ国立図書館で、ピカソの版画展が催された。</p>

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
1967年 (昭和42)	2月	福島慶子 グラン・バレとプチ・バレで開催したピカソ85歳記念大回顧展と、1932年のジョルジュ・ブティ画廊で催したピカソ展との比較について。◇「パリのピカソ85歳記念大回顧展をみて」『みづゑ』no.745	1月、レジオン・ドヌール勲章を辞退する。6～8月、ロンドンのテート・ギャラリーで、ピカソの彫刻や陶芸作品の展覧会が開かれる。これはローランド・ベンローズが企画し、10月からニューヨーク近代美術館へ巡回する。
	々	香月泰男 ピカソの85歳記念の大回顧展を見て、ピカソへの関心について述べる。◇「ピカソの作られた偉大さ」『みづゑ』no.745	
	4月	瀬木慎一 ピカソ作品の贋作の見分け方などについて。◇「ピカソの贋作」『芸術新潮』no.208	
	6月28日	アメリカでの《ゲルニカ》騒動 アメリカ人芸術家グループがベトナム戦争に抗議し、ニューヨーク近代美術館の《ゲルニカ》撤収を要望する。◇「アメリカで「ゲルニカ」騒動」『読売新聞』6月28日	
	12月2日	ピカソの話題 ベトナム戦争に反対し、サルトル、ピカソらが「ベトナム支持知識人デー」を呼びかけた。◇「ベトナム人民の苦しみ終らせよ」『朝日新聞』12月2日	
1968年 (昭和43)	1月	中原佑介 ニューヨーク近代美術館でピカソの彫刻展を見て、ピカソの現代彫刻のあらゆるタイプの片鱗を垣間見たと述べる。◇「彫刻家・ピカソ」『芸術新潮』no.217	2月13日、サバルテス死去。ピカソは彼を偲んで、連作《ラス・メニナス》をバルセロナのピカソ美術館へ寄贈する。12～翌年2月、パリのルイズ・レリス画廊で、版画347シリーズの展覧会が開かれる。
	2月	高橋巖 ピカソの《アヴィニヨンの娘たち》には形式上だけでなく、精神の問題が提出されていると述べる。◇「ヨーロッパの闇と光②」『芸術新潮』no.218	
	2月6日	吉田秀利 バーゼル市立美術館のピカソの《座ったピエロ》売却に対して住民投票で守ったことについて。◇「民主主義とピカソ」『朝日新聞』2月6日	
	11月	栗津則雄 ピカソの制作上の変貌が舞台と芸人との密接な関わりを持っていると述べる。◇「ピカソと演劇」『芸術新潮』no.227	
1969年 (昭和44)	3月	瀬木慎一 ピカソ芸術のエロティカを論じる。◇「ピカソ「エロティカ」」『芸術新潮』no.231	3月、ジャクリーヌの肖像を完成する。
	11月	澁澤龍彦 ピカソの版画347には、自分の頭にあるエロティシズムとは何か異質のものを感ずると述べる。◇「エロティシズム論 ピカソの版画347」『みづゑ』no.778	
1970年 (昭和45)	1月	東野芳明、他 今日の天才の存在について、ピカソは「才能のスーパーマーケット」（東野芳明）、「20世紀の天才」（針生一郎）、「異種混合の天才」（瀬木慎一）、「20世紀最後の天才」（藤枝見雄）など。◇「天才は今日は認められない」『芸術新潮』no.241	1月、スペインのピカソの家族が所蔵していた作品が、バルセロナのピカソ美術館へ寄贈される。9月12日、クリスティアン・ゼルヴォスが死去する。
	々	遠山一行 ストラヴィンスキー、ピエール・ブーレーズとピカソの《アヴィニヨンの娘たち》について。◇「私の一枚」『みづゑ』no.780	10～11月、ニューヨーク近代美術館でリヴァ・カステルマン企画による「ピカソ、版画の巨匠展」が開かれる。
	2～3月	ピカソ近作版画展 東京国立近代美術館で開催される。	
	3月	西脇順三郎 パリ、シカゴ、東京で展示されたピカソ・エロチカの連作版画展について述べる。◇「ピカソ・エロチカを見る日本の判定」『芸術新潮』no.243	
	4月20日	須磨コレクション寄贈 ピカソなど92点の須磨弥吉郎(元スペイン特命全権公使)のコレクションが長崎県に寄贈される。◇「須磨コレクション寄贈」『読売新聞』4月20日	
	5月7日	ピカソの話題 ピカソ、サルトルら米国のベトナム撤退を要求した。◇「ピカソ、サルトル氏らも要求」『朝日新聞』5月7日	
	8月	鳥居敏文 ピカソの少年時代の作品を、ピカソ芸術の根元を	

		なす彼のたぐいまれな多面的な描写力・写実力の萌芽をここに見ると述べる。◇「ピカソ14歳の作品」『芸術新潮』no.248	
1971年 (昭和46)	3月 〃 6月 10月 11月6日	村木明 昨年開館したバルセロナのピカソ美術館について。◇「バルセロナにできたピカソ美術館」『芸術新潮』no.255 巨匠90歳記念・ピカソ展 日本橋高島屋、大阪へ巡回 嘉門安雄 ピカソの《貧しき食事》の価格などについて。◇「一千万円のピカソの版画」『芸術新潮』no.258 黒江光彦 ヴェロリスにあるピカソの《戦争と平和》の壁画に絵が描かれた事件について。◇「塗りつぶされたピカソの絵」『芸術新潮』no.262 ピカソの話題 ピカソが共産主義者という理由で、マドリードの画廊に展示されていたピカソの作品を壊す。◇「ピカソの絵26点こわす」『朝日新聞』11月6日	冬、ピカソの最初の金属を使った構成彫刻《ギター》(1912年)がニューヨーク近代美術館へ本人より寄贈される。 4～6月、パリのルイズ・レリス画廊で、1969～71年にかけて制作したデッサン194点が展示される。
1972年 (昭和47)	1月	村木明 ピカソ90歳の誕生日にちなんでフランスの文芸週刊誌『レ・レットル・フランセーズ』が若手作家におこなった「私のピカソ観」というテーマのアンケート結果について。◇「ワールド トピック ピカソと新しい世代」『みづゑ』no.804	1～2月、ニューヨーク近代美術館で、ウィリアム・ルービンによる「ニューヨーク近代美術館所蔵のピカソ展」が開かれる。12～翌年1月、パリのルイズ・レリス画廊で、1971年11月21日～72年8月8日迄に制作したデッサン展が開かれる。
1973年 (昭和48)	3月 4月9日 5月 〃 6月 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	栗津則雄 ピカソには、本質的な衰退のきざしを認めることが出来ないと述べる。◇「天才と没落」『芸術新潮』no.279 ピカソ死去 8日午前11時40分(日本時間同日午後7時40分)南仏カンヌに近いムージャンの自宅で死亡。「アメリカ、フランス、ドイツと同じくらい日本でのピカソ展の回数は多く、ピカソとは縁が深かった。」(瀬木慎一)、「ピカソの死は20世紀の「美術の記念碑」の崩壊を告知しているようだ。」(小川正隆)、「モンパルナス時代から過去40年間、日本の画家が受けたピカソの影響は、測り知れないほど大きなものがある。」(荻須高德)等 ◇「巨匠ピカソ死去」、「巨大な足跡残した鬼才 ピカソの死、大きな波紋」、「生きた美術史 人間愛を描く」、「ピカソ祭近いのに実に残念」『朝日新聞』4月9日 瀬木慎一 ピカソの90年の画業を振り返り、各時代の代表作品を解説する。◇「特集 ピカソ90年」『芸術新潮』no.281 ピカソ・51点のリノカット展 東京フジテレビギャラリー ピカソ死去の反響 「描く欲望だけに生きられた幸福な芸術家」(池田満寿夫)、「人間的魅力に惹かれた」(福沢一郎)、「私は「ピカソ」になりたくない。ならないつもりである」(岡本太郎)、フランス他各国の反響など。◇「特集 ピカソ最後の個展」『芸術新潮』no.282 藤枝晃雄 ピカソの変貌した芸術について述べる。◇「ピカソはピカソであるーピカソの死」『みづゑ』no.819 金子光晴 ピカソをとりのこしてすすむ道が、未来の人間の前に新しくひらいていと述べる。◇「ピカソの死」『芸術生活』(特集ピカソ・天才の終焉)no.286 内村剛介 ピカソは死には応えていなかったと述べる。◇「英雄ピカソのあがき」『芸術生活』(特集ピカソ・天才の終焉)no.286 宮川淳 ピカソと現代社会の関係について。◇「神話としてのピカソ」『芸術生活』(特集ピカソ・天才の終焉)no.286 瀬木慎一 ピカソの多作について。◇「パブロ・ピカソ」『三彩』(特集パブロ・ピカソ)no.303 大島辰雄 ピカソの転身について。◇「ピカソの死」『三彩』	4月8日、ピカソ、ムージャンにて死去。ヴォーヴナルグ城の敷地内に埋葬される。



年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先 ○は日本近現代美術関連 ◎は一般事項	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連 ◎は一般事項
		(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	6月	吉田知子 ピカソが天才であるために敬遠する。◇「ピカソについて」『三彩』(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	✧	利根山光人 ピカソと出会うまでを回想する。◇「ピカソとの会見」『三彩』(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	✧	神原泰 本当のピカソをこれから研究し得るであろうと述べる。◇「サインするピカソ」『三彩』(特集パブロ・ピカソ) no.303	
	7月	瀧口修造 ピカソを巨像化してしまったことについて。◇「ピカソの詩」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	遠山一行 ピカソのやった仕事が現代のさまざまな問題に触れると述べる。◇「ピカソとストラヴィンスキー」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	松本俊夫 ピカソが映画に着手しなかったことについて。◇「ピカソ・映像・ラス=メニナス」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	東野芳明 ピカソが戦後美術を遠くからおびやかしたつづけたのは奇妙なことであると述べる。◇「ピカソ断想」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	利光哲夫 ピカソはシュルレアリスム演劇の一翼を担った劇作家であると述べる。◇「ピカソ 偉大なる演劇人」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	富岡多恵子 ピカソとガートルード・スタインの交流について。◇「ピカソとスタイン」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	高階秀爾、粟津潔、川端香男里 ピカソとその時代空間等について討議する。◇「共同討議 ピカソと20世紀芸術」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	末永照和 ピカソに手を焼いたのはほかならぬピカソ自身であったと述べる。◇「アルルカンの遺言」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	織田達朗 ピカソは「ある価値でないものに向って開かれてある世界を、特権的な価値が擁護される形式のなかに置いた」と述べる。◇「代名詞の終り」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	神吉敬三 「ピカソにとって重要なのは、人間そのものであって、主義主張ではなかったのである」と述べる。◇「ピカソとスペイン」『ユリイカ』(特集ピカソ)	
	✧	饗庭孝男 「ただの一度もピカソの全体像を理解しようと思ったことはない」と述べる。◇「青いスペイン」『ユリイカ』(特集ピカソ)	

\* ピカソについては主に William Rubin (ed.): *Pablo Picasso. A Retrospective*, The Museum of Modern Art, New York (W. ルービン編集 山田智三郎・瀬木慎一監修『パブロ・ピカソ 天才の生涯と芸術』旺文社、1981年)を参考にした。